怪情報考（その二）
怪情報の諸相

原　口　庄　輔

１．はじめに

情報には，まともな正しい情報と，怪しげな誤った情報・有害な情報の二つがある。情報処理に際しては，この二つを見分け，まともな正確な情報に基づいて適切な判断を下さなければならない。と同時に，誤った情報や有害な情報の性質を研究し，それに惑わされないようにし，対処法を考えておき，的確な判断を下せるようにしておかなければならない。

怪しげな情報やおどろどろしい情報などは，見るのもいやな気がすると拒否反応を示す人が多いことであろう。実を言うと私自身もそうである。しかし，社会を正常に保つためには，たとえ気にくわなくても，怪しげな情報とも積極的に取り組み，その本質を明らかにし，それに惑わされないよう，その問題と取り組むことによって，有効な対策を講ずる必要がある。

怪情報を研究しなければならないのは，裏の世界あるいは負の世界の研究が重要なのと同根なのである。正の世界を守り，正の世界を健全に保つためには，負の世界を理解し，それに負けないような対策を常に講じておく必要がある。これは，社会を守るためには危機の性質を明確にし，危機管理の対策をしっかり講じなければならないことと平行関係にあることである。

怪情報などという余り愉快でない情報を相手にするのは，社会生活を快適にするために，あるいは，人々を怪情報から守り，平穏に生活ができるようにするためにやむを得ないことである。平和を望むならば，平和を乱すようなものや，平和の敵になるようなものについて研究し，それに対する防御システムを確立しておかなければならないのと何ら変わるところはない。

怪情報に踊らされないように，また，それに負けないような対策を講じておくことは，みんなが快適に暮らすために，極めて重要な意味をもつことである。殊に，日本は怪情報対策さらには危機管理のシステムがお粗末であることが，神戸・淡路大震災によって，はからずも露呈された。危機管理対策を確立し，

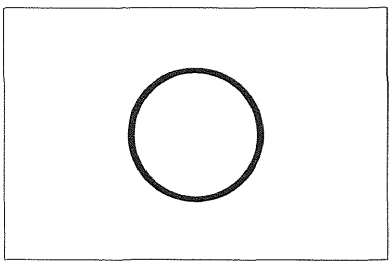
怪情報対処法を明確にしておくことは，危機に強くなり，怪情報に踊らされないための最良の方法である。その対策を真剣かつ早急に立てなければならないのは，日本はデマやプロパガンダに弱く，ちょっとのことで人々がパニックに陥る危険性が大きいからである。日本の社会は，集団ヒステリーになり易い体質を多分に残しているという点で，極めて危険な面を有しているのである。

そのようなことにならないように，我々は怪情報に強くなり，不要な損失を被らないようにしなければならない。その意味で，負の世界の研究の一環として，怪情報について研究することはこの上ない重要性をもつのである。

2．まともな情報と怪情報

世の中には，誤った情報・有害な情報を始めとして，怪しげな情報がいたるところで流布されており，氾濫している。まともな情報・正確な情報・良い情報などに対して，これらの怪しげな情報の総体を怪情報と言うことにする。情報の総体が，下記のベン図の全体に当たるものとしよう。事実に立脚したまともな情報の集合をベン図のマルで示すとすれば，残りの補集合はすべて怪情報ということになる。

（1）



論理的には，情報の性質を突き詰めて行くと，このようになると考えてよい。しかし，問題なのは，現実の場でには，まともな情報か怪しげな怪情報かはっきりしないところがかなりあるということである。怪情報は得てして，これこそ正しい情報であるというような様相を呈していることが多い。悪人が，悪人らしく見えないことが多いのと同列である。

もちろん，様々な脅迫や，いたずらや，不幸の手紙など，一見して怪情報であることがわかるものもかなりある。それらの典型的なものとしては，例えば次のようなものをあげることができる。

（2）　a．不幸の手紙・幸福の手紙・かみそりや爆弾などを送ったもの
b．脅迫状・脅迫電話・無言電話・ゆすり
c．嫌がらせ・無視やからかいなどを含む悪さやいじめ一般
d．脅迫や暴行など犯罪の総体
e．詐欺・誇大広告・嘘・ごまかし・偽物
f．密告・悪口・中傷・悪質な噂
g．ガセネタ・虚偽（にせ）の情報
h．流言（デマ）・飛語・悪質な宣伝活動・アジ演説
i．からかい話・かつぎ話（hoarx）
j．都市伝説（urban legend）
k．コンピュータ・ウイルス
l．ねずみ講・無尽
m．犯行声明

もっとも，これらの中には，一見怪情報とはわからないものも含まれている。例えば，「駅から10分」というような誇大広告などは，「車で」というような情報を隠している場合，自分で行って確かめてみなければ，誇大広告であることがわからない。また，大売り出しなどで，かつてあるデパートでやったように，正札には三割引などと安売りの情報があったとしても，正札のもとの値段を水増ししてあれば，何の安売りにもなっていないこともある。さらには，かつてマスコミをにぎわした「なんちゃっておじさん」や人面魚などの都市伝説なども，まことしやかではあるが，結局は怪情報であったと判明するというようなこともある。

怪情報は，一見それとわかるものや罪のないものについては，比較的対処がしやすい。しかし，たちの悪い怪情報に対しては，毅然とした対応をとり，そのような情報の流布や再発を防がなければならない。そのための危機管理のシステムをしっかり整備しておくことも重要である。

怪情報でたちの悪いのは，一見まともな情報の体裁をとっており，それとわからないたぐいのものである。ねずみ講のようなものは，今やかなり多くの人が，怪情報であり，引っかかることがなくなっている。しかし，人の欲につけ込むために，いまだに引っかかる人がいることも事実である。このことは，コンピュータ・ネットワークにもねずみ講が登場して，それに引っかかっている人がいることからも窺い知れる。

もっと笑えるのは，エロ本などの通信販売やセックス絡みの詐欺や美人局などがマスメディアで取りあげられ，如何に巧妙な怪情報からなっているかが報道されることである。しかし，マスメディアなどで取りあげられる頃には，かなりの被害が出てからであることが多い。自業自得とは言え，犯罪であるから笑ってばかりはいられない。不況がじわりと進行しつつある現在，犯罪絡みの怪情報が一層跋扈する恐れがあるから，用心するにこしたことはない。そのような怪情報に引っかからないためには，うまい話には裏があるという昔からの警句に従い，用心して手を出さないようにし，欲の皮を突っ張らせないことが最低必要であろう。

情報の中でまともな情報か怪情報かがはっきりしないものやわかりにくいもの，さらにはかなり後になってみないとわからないものなどがあり，どちらか境界が明確でないものが最も対処が難しい。しかも，世間一般に，まともな情報を報道していると見られている新聞やテレビなどをはじめとするマスコミなどにも，怪情報が紛れ込んでいる。いわゆる「やらせ」は論外としても，まじめな記事などの中にも怪情報が含まれているので，油断ができない。

3．怪情報の性質

怪情報の中には，意図的なものもしくは悪意に基づくものと，意図的ではないが，不正確であったりしたために，怪情報に変質したものもある。意図的な怪情報には，(2)でみたようなものがあげられる。意図的でない怪情報には，情報が正確でなかったり，表現の仕方が悪かったり，誤解していたり，思いこみの結果などに起因するものが含まれる。それらは，次のようにまとめることができよう。

(3) a． 不正確な情報に起因する怪情報
b． 表現の仕方がまずいための怪情報
c． 物事に関する誤解に起因する怪情報
d． 思いこみの結果に起因する怪情報
e． 善意に基づいて伝達された怪情報
f． 偶然の怪情報

例えば，不正確な情報は，即，怪情報の一種になる。この点は一般には見落と

されている点である。例えば，SOD の第 4 版に関して今里は次のように書いている。

（4）　「今回の *New Shoter OED* が初版から六〇年目でやはり 3 倍強の増加と聞いたとき，さもありなんと一人笑壺に入った。」

しかし，これは誤解であり，原口・原口(1998)ですでに指摘したように，「1933年以降60年間で12倍強になっており，1973年以降20年間でもほぼ12倍近くになってるのである。」これなどは，不正確な情報を鵜呑みにした結果，気の毒にも図らずも怪情報を発信する結果になったものである。

この世の中には，この種の怪情報がうようよしているから，油断がならない。自分で確かめないと思いもかけず怪情報を発信する羽目に陥ってしまうのである。しかし，我々は忙しさに紛れて，人の情報を信用してそれに基づいて様々なことを判断しがちである。思いもかけないところで足をすくわれることもあり得るから，研究者としては心しなければならない。

人に関するネガティブな情報も，得てしてやっかみに基づくことがあるし，ポジティブな情報も特定の意図が働いていることがあるから気をつけなければならない。怪情報に図らずも踊らされる結果にならないようにしないと，判断を間違える羽目に陥ることもある。リヤ王のように，怪情報に惑わされて，悲劇の主人公になったのでは，それこそ悲劇以外のなにものでもない。

このように，（4）で示したような悪意のない怪情報は，あらゆるマスコミの報道にも潜んでおり，研究論文などにも潜んでいるのである。研究書や論文などにおける海賊行為は，意図的な怪情報制作の行為であるから問題外としても，様々な意図しない怪情報を少なくするような努力が，社会のあらゆる面でなされなければならない。責任が重い立場に立つほど，意図しない怪情報に気を配らなければならない。

例えば，誤解に基づく怪情報の場合，痛くもない腹を探られるというようなことにすらなることがある。誤解に基づく怪情報というのは，誤解が解ければ怪情報のもとはなくなるが，怪情報そのものは簡単に解消しないという点が面倒である。いずれにしても，誤解をしないように，また誤解を招かないように自戒することが必要である。が，相手の誤解を招かないというのは，相手が悪意をもっている場合や偏見をもっている場合は，極めて難しい。

怪情報には，発信者の名前かそれに類する情報をもつものと，匿名のものも

しくは，まやかしの発信者を名乗っているものがある。名前のない(あるいは，目くらましの名前のある)怪情報には，次にあげるような様々な怪文書がある。

（5） a． 選挙などの際の怪文書
b． 脅迫状，脅迫電話
c． 密告・悪口・中傷・噂
d． ガセネタ・虚偽（にせ）の情報
e． 流言（デマ）・飛語・悪質な宣伝活動・アジ演説
f． 都市伝説（urban legend）
g． コンピュータ・ウイルス

例えば，いわゆる岡光怪文書と言われるものは，選挙用の紙爆弾としてばらまかれたもので，次のように，内部告発が匿名でなされていたという。

（6） 「埼玉は「彩」の国であることから法人のほとんどに「彩」がついているのが特徴ですが，上尾市の「あけぼの」に関しては何故か「光」という字が入れられているのです。これらについては，この方とべったり癒着している厚生省の大幹部の名字を一字入れたということで，この幹部は最近役人の天下りを容認する発言をしている方だそうです。」（夕刊フジ平成８年11月21日の引用記事より）

この怪文書は，その後厚生省汚職に発展した内幕の一端を正確に述べているという。事情をよく知った人物が書いたものであると推測されているが，詳細は不明である。この種の怪文書は，最低なにがしかの真実を含んでいることがあるようで，興味深い研究対象である。

これとは性質を異にしているが，神戸の小学六年生殺人事件を起こした中学生が送った脅迫状には酒鬼薔薇聖斗の名前が書いてあった。この名前自体，浮き世離れをした漫画的なものであり，分析対象として興味をそそる。しかし，この名前自体は，目くらましでしかなかった。

この事件では新聞も週刊誌もテレビもそろって怪情報を流し続けたという点でも興味深いものであった。これらのマスコミは競うかのように，黒い不審車とか不審な中年男などに関する怪情報を流し続けた。怪情報の報道の繰り返しで虚像を生んでいったのである。その結果が，「まさかの中学生」という驚き

になっていった。

マスコミの怪情報報道は，オウム真理教の起こした松本サリン事件でも遺憾なく発揮された。その結果が，被害者の一人を犯人と決めつけたような報道であった。この事件は不幸中の幸いながら，後になってオウムの犯行であることが明らかにされ，犯人と疑われた人は，濡れ衣であったことが明らかになった。マスコミは，事実の報道が仕事で，犯人探しや推理が仕事ではないにも関わらず，報道媒体を利用して，越権行為を重ねていたことは，重大な問題である。自ら間違っているという認識すらないのであるから，重傷というべきか。

確認されていない情報が怪情報になることの危険性を無視した報道の繰り返しが，被害者を作りだしたのである。その後の毒入りカレー事件では，多少の自戒は働いたものの，同じ様な怪情報を書き立てていたり，報道しているところを見ると，怪情報を生みだすのは報道というものの宿命なのかとすら思えてくる。

テレビにしろ新聞にしろマスコミの因果なところは，時として正義面をして，犯人（とおぼしき者）に対して糾弾することが多々見られることである。自らはいかがわしい怪情報を常に垂れ流しているにもかかわらず。これらの報道機関は，正確な情報を報道すればそれで十分なのであって，犯人や悪者を責めたり糾弾したりする必要はない，ということを徹底的に認識すべきであろう。

マスコミは，正義の代理人になる必要などは全くないし，正義漢面をして決めつける必要もない。ところが，なかには「売国奴」などと時代錯誤的決めつけをしたり，「狂気と犯行予告の戦慄」などといたずらに扇情的な見出しをつけて，人目を引こうとする。これらの決めつけや扇情的な表現は，怪情報の一種であるという認識すらないようである。困ったことである。

テレビなどの俗悪番組を制作している連中は，俗悪であると避難されると，得てして「俗悪で何が悪い」と開き直ることがある。俗悪が悪いのは，俗悪という怪情報を垂れ流し，人の心に毒を振りかけて，精神に害毒を注ぐようなものであるから悪いのである。たとえて言うと，精神に害毒を及ぼすダイオキシンを振りまいているのと変わらない。そのようなことも分からない連中は，言うまでもなく，テレビに出たり番組を作ったりする資格はない。

4．怪情報への対処法

怪情報は，その性質に応じて適切な対処法を講じなければ，社会や個人に害

毒を及ぼすことがある。怪情報を可能な限り少なくすることは，健全な社会にするために，重要極まりないことである。

怪情報に強くなるにはどうすればよいのであろうか。その中心となる対処法について見ておくことにしよう。それらは次のようなものからなると思われる。

（7）a．真贋を見抜く目と判断力を養う。
b．怪情報に惑わされない意志の力を養う。
c．怪情報の特質を心得ておき，怪情報を見分けるシステム作りをする。
d．うまい話には乗らないよう用心深くなる。
e．欲得抜きの生き方をする。
f．怪情報に引っかかったときの危機管理の方策を立てておく。
g．被害を最小限に止めるために，勇気を持って警察などしかるべき機関や専門家に相談をする。
h．常時相談に乗ってもらえる相手を作っておく。

このほかにも効果のある対処法はいくつかあろうが，少なくてもこれくらいの用心は欠かせないであろう。

見る目を養うことは，怪情報に引っかからないために有用であるだけではない。生きて行く上で，あらゆることにとって重要である。見る目があれば，偽物をつかませられることもないであろうし，変な人物にごまかされる危険も，完全になくすることはできないにしろ，少なくすることは不可能ではない。

怪情報は，一見まともな情報の様相を呈しており，得をすることができるなどと利益誘導をすることがあるから，それらに惑わされない意志力と用心深さを身につけておかなければならない。欲の皮を突っ張らせないことはもちろん，欲得抜きの人生を送れるようになれば，怪情報で失敗する危険は激減することになろう。

怪情報を見分けるシステム作りは，見る目を養うことと平行してなされるべきであろう。そのようなシステムがあれば，一呼吸間をおくことができるし，一見まともな情報を検討し，信頼に足るものかどうかを見極めてから行動することができる。これは，極めて重要な点であり，質の良いシステムを作っておくことは，人生を間違わないためにも有用である。そのシステムの中核は，優れた武将が軍師や知恵袋などを重用していたことと一脈通じる。心おきなく相

談できる有能な友達をもち，必要に応じて忠告してくれる人材を身の回りにもつことができれば素晴らしい。

危機管理の方策を立てておくことも欠かせない。特に，不幸にして怪情報に引っかかったときには，その対処法を日頃から考えておくだけで，被害はずいぶん少なくできるものである。損をしたときには，取り返す努力も大事であるが，これ以上損を重ねないよう，それまでの損を授業料とあきらめて，関係を断ち切る勇気も望まれる。何時までも損にとらわれないことや，くよくよ思い悩まないことも大切である。

犯罪絡みの場合には，早めに警察なりしかるべき機関や専門家に相談し，適切な処置を講ずることが不可欠である。脅迫を受けたり，弱みをネタにゆすられたりといったような身の危険を伴うときは，勇気をもってしかるべき機関と相談することが，問題の解決の第一歩である。世間体を気にして一人思い煩うなどしていては，ますます深みにはまる恐れが増大する。怪情報に対しては，勇気をもって対処しなければ，犯罪を少なくすることは難しい。

幸福の手紙に関する拙稿（原口（1997））でも明らかにしたように，脅しには敢然と立ち向かわないと，相手の術中にはまってしまうのである。他人にコピーを送らないと悪いことが起こるなどという脅しは，何の根拠もないのである。そのような怪情報を送り，人にいわれのない恐怖を与えるような者にこそ，そのうちに天罰が下るというものである。何の根拠もないことを恐れてはならない。勇気をもって戦ってほしい。そのような勇気こそ社会をよくするのに役立つのである。

以上要約すると，怪情報に惑わされないためには，見る目を備え，危機管理システムを確立し，欲得から離れ，用心深く行動することが肝要である，という結論になるであろう。

5．おわりに

怪情報について，一般的な観点から概観してきた。怪情報は，一見して怪情報であることが分かるものについては，対策を講じやすいし，惑わされることも比較的少ない。要は，怪情報に対して，しかるべき人と相談するなどして，毅然と立ち向かうなら，その被害を被ることはまずあり得ないし，被害を被っても最小限に止めることが可能である。

怪情報と分からないものや分かりずらいものに関しては，その真贋を確かめ

て，怪情報であることが分かればそれに乗らない勇気をもつことが肝要である。怪しい人物や物事ほど，怪しく見えないものである。日頃見る目を養っておくことも，怪情報に対する有効な手だてである。

また，怪情報に対処するには，前節で見たようなことに最低限心がけることが必要であろう。その際に，危機管理の方策を講じて，怪情報による被害を最小限にするシステムを個人として作っておくことはもちろん，それぞれの組織としても備えておく努力が望まれる。

しかも，怪情報に強い社会にするには，一人一人が，見る目を養い欲得を離れ，用心深くなり，怪情報に惑わされないようにする一方，組織としても，怪情報に対処するノウハウを蓄え，システム作りを十分にしなければならない。例えば，会社などが，総会屋などにゆすられたり脅されるのは，自らの行動を正せば，最小限に防ぐことが簡単にできることである。しかし，やむを得ない理由でゆすられた場合に，どうするのが長期的に見て賢明であるのかを見極めて対処することが，身を守る最大の方法である。

この世の中には，様々な人や組織があり，怪情報があふれている。国際化により，人的交流が活発になると同時に，犯罪者やテロリストや闇の世界の手が見えないところで身のまわりに迫ってくる可能性も大きい。それらの怪情報に引っかからないためにも，社会全体としてしっかりした防御システムを強化しておくだけでなく，個人の面でも怪情報に引っかからないよう，対策を講じておかなければならない。

豊かで安全でよりよい社会を築くためには，負の世界に属する怪情報についての研究をもっと組織的に行い，それに対する対策をしっかり確立しておくことが不可欠である。我々は，自分を守り社会を守るためにも，怪情報に強くならなければならないのである。

その対策の最も重要なポイントで，これまで触れなかった点は，怪情報を発信しないように一人一人の心を強くする，倫理教育や人物教育をもっと徹底させて，しっかりやることである。悪や怪情報に対する強力な防護壁を心の中に作り上げることである。それなくしては，怪情報を減らし，怪情報と効果的に対抗することはかなりの困難を伴うことになるであろう。

心の中に悪や怪情報を憎み，悪を行わない勇気を育て，怪情報を流さないように心がける堅固な砦を作ることが，諸々の制度や法律を最も効果あらしめるために有効なのである。これは，平和を守るためにも，安全な社会を築くにも重要な点である。

最近の報道によれば，小学校でも学級崩壊などの兆候があるとのことである。これが事実とすれば，これからの日本の社会の平和と安定にとって，極めて憂慮すべきことが起こりつつあるということになろう。事実を確認して，これが怪情報でないことが明らかになれば，それを克服するための対策をしっかりと立てなければならない。

注

＊　本稿は，東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究の援助を受けて行われた研究の成果の一端である。記して感謝の意を表する。

参考文献

今里智晃（1994）「英語に根づけ，日本語起源の語」『月刊言語』（8月号）23：8,6-7.
原口庄輔（1997）「怪情報考（その一）幸福の手紙」『筑波英学展望』16,73-89.
原口庄輔・原口友子（編訳）（1998）『新「国際日本語」講座』東京：洋販出版.